

# コラージュ療法・ブロック技法における研究の動向と今後の展開

Collage Therapy and Block Technique : A Review and Perspective

加藤 大樹

Daiki KATO

## I. はじめに

臨床心理学的援助における技法の中に芸術療法の諸技法がある。これらは、様々な表現を通じて治療的効果を得ることや、臨床心理学的アセスメントの手がかりとして活用することを目的として開発されたものである。

本論文においては、数ある芸術療法の技法の中でも、特にコラージュ療法とブロック技法という2つの技法に関して、基礎的研究を中心にこれまでの研究の動向をまとめる。

わが国における、心理臨床場面でのコラージュの活用は、1987年に森谷によって、箱庭療法の理論を元にコラージュ技法が開発されたことにはじまる（森谷，1988）。雑誌や広告から自分の気に入った素材を選択し、画用紙の上に貼り付けることで表現をすることが特徴である。箱庭的な発想に基づくコラージュ療法は、日本人にとって親和性のある構造を持つと同時に、治療効果、アセスメントの両面から活用可能であることから、病院や教育現場など現在では様々な領域で利用されている。携帯が可能であり、様々な場所や集団の中で適用することができることも活用の幅を広げる要因となっていると考えられる。コラージュ療法の特性を適切かつ最大限に活用

するためには、基礎的研究や事例研究の蓄積が不可欠である。コラージュ療法に関しては、国内、海外ともに、これまで多くの研究が蓄積されており、研究の動向をレビューした論文もいくつか見られる（森谷，1993；今村，2006；佐野，2009a，2009bなど）。本論文においては、これまでのコラージュ研究における重要な研究について振り返ると同時に、最新の研究の動向について展望する。

また、芸術療法の研究領域において、個々の事例に応じた援助を行う上で、新しい技法を開発することは重要な課題の1つである。本論文においては、ブロックを用いた表現技法について、開発に至る経緯についてまとめ、その詳細を紹介する。ブロック技法は、基礎板という保障された枠組みの中で、プラスチック製のブロックや既製の人形を組み合わせることによって表現をする技法である。ブロックという素材は、表現の自由度が高く、3次元の表現ができることや、持ち運びができることなどから、芸術療法における表現の幅をさらに広げる可能性を持っていると考えられる。また、ブロック技法の今後の発展に深く関わりとされる、近隣領域における研究の動向についても展望する。

## II. コラージュ療法の概要と研究の動向

### 1. コラージュ療法の背景と概要

コラージュの語源は、フランス語の「糊付け」という意味の「coller」ということばにある。20世紀初頭、ピカソやブラックなどの画家たちによって、キュビズムが創始され、これが後に、パピエ・コレやフォトコラージュ、アッサンプラージュという手法に発展していった。パピエ・コレは、新聞、雑誌などの紙片や、樹脂などの素材をキャンパスの上に貼り付けることで表現をする技法であり、フォトコラージュは、いくつかの写真の組み合わせによって表現をするものである。パピエ・コレやフォトコラージュが2次元上の表現であるのに対し、アッサンプラージュは3次元上の表現であることが特徴である。空き缶などをはじめ、身の回りにある様々な既製品を用いて、立体的な表現が行われる。美術の分野においては、このように、様々な素材を貼り合わせることで表現する技法を総称して、コラージュ技法と呼んでいる。

コラージュ技法は、美術分野における新たな表現への模索の中から生まれてきたものであるが、後に、芸術療法における表現手段の1つとしても注目されるようになった。実際の臨床場面においては、主に、森谷（1993）によって命名された、コラージュ・ボックス法と、マガジン・ピクチャー・コラージュ法という2種類の形式が用いられている。コラージュ・ボックス法は、箱の中にあらかじめ様々な種類の切り抜きを用意しておき、制作者は、その中から気に入ったものを選択し、用紙の上に貼り付けていく。これに対し、マガジン・ピクチャー・コラージュ法では、制作者は雑誌や広告から好きな部分を、はさみを使って切り抜き、それを用紙の上に貼り付けていく。どちらの技法も、選択して貼り付けることにより表現をするという点は共通しており、ク

ライエントの特性などに応じて、両方の形式が活用されている。

コラージュ療法には、主に、臨床心理学的援助における治療の効果と、クライアントのパーソナリティや心理的問題を理解するためのアセスメントの媒体としての2つの側面がある。たとえば、中井（1993）は、治療的意義を考える上で、コラージュ療法が、「まとまろう」とする統一的方向性と、「ちらばろう」とする分散的方向性の両面を兼ね備えていることの重要性について言及している。臨床心理学的アセスメントに関しては、コラージュは、それを制作した人の様々な側面を多分に反映したものであると考えられる。これまでに、パーソナリティや病態水準などの観点から、多くの研究が積み重ねられ、実際の臨床場面において、セラピストがクライアントの表現と向き合う際の手がかりとして活用されている。

### 2. コラージュ療法に関する研究の動向

コラージュ療法に関する海外の初期の研究としては、Buck & Provancher（1972）や、Lerner & Ross（1977）などがある。これらの研究は、ともにAmerican Journal of Occupational Therapyに掲載されたものであり、コラージュ表現を用いたアセスメントとしての色合いが強いことが特徴である。Buck & Provancher（1972）は、コラージュ表現を用いたアセスメントに着目し、その内容がしばしば無意識的葛藤を投影するため、評価技法として有用であることを指摘している。Lerner & Ross（1977）は、臨床群と統制群の比較を通して、コラージュ表現の客観的なスコアリングの試みを行っている。その結果、臨床群の作品特徴として、切り抜きの数の少なさ、バランスの欠如、人間の切り抜きの少なさなどが認められた。これらの指

標は、コラージュを用いたアセスメントにおける重要な視点であり、現在の基礎的研究に与えた影響も大きいと考えられる。この他に、コラージュ表現に関する初期の基礎的研究としては、Carter, Nelson & Duncombe (1983) や、Adelstein & Nelson (1985) などがある。Carter, Nelson & Duncombe (1983) は、ユングのタイプ論に基づいた検討を行い、Adelstein & Nelson (1985) は、グループ制作場面において、素材を共有するか否かによる効果の違いについて検討した。このように、海外においては、1970年代から80年代にかけて、いくつかの基礎的研究が見られる。これに対し、日本におけるコラージュ療法の、海外とは異なった発展を遂げている。日本においては、精神神経学雑誌に、コラージュ技法に関する学会発表の内容 (森谷, 1988) が掲載されて以来、多くの研究が積み重ねられ、実際の臨床場面においても広く活用されてきた。森谷 (1990) が、携帯できる箱庭という発想について述べているように、日本におけるコラージュ療法の、箱庭療法との関連が深く、実際の臨床場面における試みの中から発展してきたことが特徴的であると考えられる。

わが国における、コラージュ作品に関する基礎的研究としては、主に、治療効果や表現特徴などに関するものがある。

まず、治療効果に関するものとしては、近喰 (2000)、青木 (2001) などがある。これらの研究では、POMSやエゴグラムを用いた検討をしており、制作による気分変容に対する好影響が示されている。

表現特徴に関する基礎的研究として、滝口・山根・岩岡 (1999) は、学校段階によるコラージュの特徴を明らかにするために、大規模な発達の研究を実施している。このような研究は、コラージュ表現の一般的な特徴を把握す

る上でたいへん重要な研究である。また、パーソナリティ特性と表現特徴を比較した研究として、佐藤 (2002) や、佐野 (2002) がある。佐藤は、YG性格検査を用いて、作品・制作特性の性格類型による群間比較とともに、各尺度得点と作品・制作特性指標との分析を行っている。佐野は、YG性格検査に加えて、MMPIを実施し、各下位得点とコラージュの客観的評価指標との関連を検討している。これらの研究の結果から、制作者のパーソナリティ特性と、表現特徴の関連が示された。

また、統合失調症患者の表現特徴を分析した研究として、今村 (2001a, 2001b) がある。今村 (2001a) は、統合失調症患者と一般成人を対象とし、統一材料を用いた量的比較を実施している。これによって、統合失調症患者の作品における、表現の乏しさ、活動性の乏しさ、空間的認知特徴などが明らかにされた。また、今村 (2001b) は、「枠づけ法」を用い、統合失調症患者と一般成人の作品を比較している。この結果、統合失調症患者と一般成人のそれぞれにおいて、枠の存在による異なった効果が認められている。

最近の研究の動向として、表現特徴に関するものでは、コラージュ表現を印象評定の観点から分析した今村 (2004) や、5因子性格モデルをもとにコラージュの表現特徴を検討した宮澤 (2004) などがある。体験過程に関する研究では、孤独感をテーマに内的体験の変化を検討した鋤柄 (2005) や、継続制作における体験過程を分析した中島・岡本 (2006) などがある。

教育現場におけるコラージュの活用というテーマでは、加藤 (2005, 2006a) などがあり、これらの研究では、高校生を対象に学級におけるコラージュ制作を実施し、内的体験や生徒理解の観点から検討が行われた。これまでに示されてきたパーソナリティと表現特

徴の関連に加え、学級適応と表現特徴の関連が明らかにされた。

さらに、2010年に「コラージュ療法学研究」が発刊され、事例研究、基礎的研究ともに、新たな知見が蓄積されている。たとえば、この中で、山上(2010a, 2010b)は、コラージュ表現のスコアリング・カテゴリーを提唱し、数量的検討と質的検討の両面から統合的な解釈の可能性を検討している。このように、コラージュ療法に関する研究については、様々な観点からの今後の発展が期待される。

### Ⅲ. ブロック技法の概要と研究の動向

#### 1. ブロック技法の背景と開発の経緯

ブロックは、プラスチック製の積木を指す言葉であり、もともとは子ども用の玩具として開発されたものである。ブロックは、組み合わせにより、自由な発想で無限の表現が可能なことから、年齢や性別を問わず、世界中で多くの人々に愛されている玩具の1つである。ブロックは、デンマークのレゴ社によって開発され、世に送り出された。まず、1949年に、レゴ社の創始者であるクリスチャンセンによって、現在のレゴブロックの原型であるオートマ・ビンディング・ブロックが開発された。その後、スタッド・アンド・チューブという機構が発明された。スタッド・アンド・チューブは、突起と管によってブロックどうしを結合させる仕組みであり、これによって、ブロックの表現の幅が飛躍的に広がることとなった。ヨーロッパを中心に発展したブロックが、初めて日本で紹介されたのは、1960年代のことである。以後、日本においても自由度の高い玩具として、広く浸透し、インテリアや、芸術表現の素材などとして、大人たちの間でも親しまれている。

心理臨床の分野でブロックを活用した試みとしては、今川・大西ら(1985)、入江・大

森(1991)、入江(2004)などがある。今川・大西ら(1985)は、「面接後ブロック構成について」という研究の中で、精神科の外来患者に対し、面接後に別室にてブロック構成を導入し、その効果を検討している。この結果、面接後にブロックを構成する行為は、クライアントが面接によって得た内的体験を補完する効果や、なだらかな現実への移行を促す効果があるとしている。また、入江・大森(1991)は、「相互ブロック作りを介した場面緘黙児の精神療法過程」という事例研究を発表している。この中では、セラピストとクライアントが治療過程の中で相互にブロックによる作品制作を行い、治療の進展につれて、その表現が豊かになっていく様子がまとめられている。また、入江(2004)は、心理臨床場面におけるブロックを用いた表現に対し、「ブロック技法」ということばを初めて用いて、芸術療法における技法の1つとしての発展の可能性を示している。これらの研究は、心理臨床におけるブロック表現の活用の可能性を示唆するものとして、重要な意味を持つと考えられる。実際の心理臨床場面では、遊戯療法などの場面において、ブロックが表現の媒体として用いられることは多いと考えられるが、その発展の可能性を研究としてまとめる試みは、入江・大森(1990)や入江(2004)以来行われてこなかった。このような背景のもと、加藤(2006b)は、箱庭療法やコラージュ療法の理論を応用し、ブロック表現に保障された枠組みという要素を加え、新たな技法を試み、その効果や活用の可能性を検討した。

臨床現場において、ブロックを表現の媒体として活用していくためには、今後の研究の蓄積が重要であると考えられる。

## 2. ブロック技法の詳細

### ①ブロック技法の特色

ブロック技法は、箱庭療法やコラージュ療法の理論を応用しており、これらの技法と共通する部分も大きいですが、ブロック技法のみが持つ独自性も存在すると考えられる。

木村(1985)は、箱庭の特徴として、表現が手軽であり、誰にでも興味を持たせるに十分なものであり、ほとんどの人がモチベーションを高め、抵抗なく入っていける素材であることや、また、砂に触れることは、成人でも子どもでも、治療に必要な適度の退行を引き起こす効果があり、緊張の高いクライアントにも有効であることを指摘している。

また、中村(1999)は、コラージュ療法の独自性として、「カッティング」、「構成」、「貼付」の3つを挙げている。カッティングは、パーツを選択して切り取ることと、いらない素材を排除することの2つの意味を持ち、構成の段階では、クライアントは組み合わせをしながら、その時に浮かんだイメージにもとづいてパーツの位置の確認をする。また、貼付は、寄せ集めたパーツを配置して構成したクライアントが、いま一度確認しつつそれらを台紙に「貼り合わせ」をしてコラージュ作品を作り終える段階である。

箱庭やコラージュにおけるこれらの特徴を、ブロック技法と比較すると、既製の素材を材料とし、それを選択し構成するという点では共通している。また、広いスペースを必要とせず比較的簡単に持ち運びが可能なこと、立体的な表現が可能なこと、両方の特徴を兼ね備えていることは、ブロック技法の独自性であると考えられる。箱庭療法やコラージュ療法に比べ、ブロック技法では、使用する素材の特性から、「構成する」という要素が強いと考えられる。この構成という要素の強さは、制作時の体験過程や完成した作品の表現

特徴にも影響を与えるのではないかと。また、コラージュ療法は、その発生の起源から芸術的な要素を多分に含んでいるが、ブロック技法の場合、「遊び」としての要素が大きいことが異なる点として挙げられる。この点も、制作時の体験過程や治療効果、表現特徴に影響を与える重要な要素の1つであると考えられる。

### ②材料と枠について

箱庭療法においては、制作者は、多くの玩具の中から気に入ったものを選択し、それを砂の上に配置していく。河合(1969)は、箱庭において必要な玩具として、人・動物・木・花・乗り物・怪獣などを挙げている。また、宗教的なものや柵、塀なども重要であるとしている。これらの玩具の組み合わせや配置のしかたによって様々な表現が可能である。

コラージュの場合、素材は主に雑誌や広告などから選ばれる。制作者は、数ある対象の中から、自分の気に入ったものを選択的に取り入れ、構成していく。材料に関して、雑誌や広告という素材は、我々の身の回りに日常的に存在するものであるが、その中にはあらゆるイメージが含まれており、その組み合わせによって、多彩な表現ができることがコラージュの魅力の1つであろう。

ブロック技法に関しても、何も無い状態から作品を創り出すのではなく、素材を組み合わせることにより表現をするという点は、箱庭やコラージュ療法と共通している。立方体や直方体の、様々な色合いのブロックは、その組み合わせによって無限の表現が可能であり、表現の自由度の高さとしては、粘土などを用いた造形に近い要素も有している。しかし、自由な表現が可能である反面、単純な形状のブロックのみで自分のイメージを表現することには、時としてかなりの技術と労力を必要とする。そのため、ブロック技法では、基本

的なブロックに加え、特殊な形状のブロックや既製の人形も材料として用いる。特殊な形状のブロックや既製の人形は、ある程度の形の備わった素材であり、制作者のイメージを形にすることを助けると考えられる。このような、既製品の組み合わせによる表現のしやすさと、柔軟な造形が可能である点の両方を含むことが、ブロックを用いた表現の特徴であると考えられる。

また、箱庭とコラージュの2つの技法に共通するものとして枠の概念がある。枠が保障されていることによって、安心して自由な表現をすることが可能となる。箱庭は木枠によって、コラージュは画用紙によってこれが保障されている。ブロック技法では、作品を配置する基礎板がこの役割を果たし、制作者はこの基礎板の上で独自の世界を展開することができると思われる。

### ③治療効果とアセスメント

芸術療法における治療的效果を考える上で、重要な要素の1つとして、心理的退行を促すことがあげられる。箱庭療法における心理的退行に関して、河合(1969)は、砂に触れることは治療に必要な適度の退行を起すのに役立ち、これは成人の場合にも認められるとしている。ブロック技法においては、ブロックという素材が元来持っている遊びのツールとしての魅力や、気に入ったブロックどうしを結合させ、配置し、イメージを形にしていくなプロセスが、心理的退行を促すものと考えられる。

この他に、箱庭の治療効果について、河合(1969)は、クライアントは治療者の受容的態度というサポートを受けながら、自分の表現の意味を把握し、それを土台としてより深い部分へと手を差し伸べることにあるとしている。制作場面における治療者の存在、治療者との関係性は、あらゆる芸術療法の技法に

おいて重要な要素である。ブロック技法においても、他の技法と同様、守られた治療構造の中で、セラピストに見守られながら自由な表現をすることに大きな意義があると考えられる。そのため、制作場面における、クライアントとセラピストの関係性や相互作用は、治療効果を考える上で欠かすことのできない重要な要素の1つであると考えられる。

木村(1985)は、箱庭療法の治療的要因として、心理的退行に加え、自己表出、内面の意識化、美意識の満足などをあげている。箱庭療法とコラージュ療法は、理論的にも構造的にも共通した部分が多く、治療的效果に関しても共通するところは大きいと考えられる。ブロック技法もまた、これらの技法の理論を背景に開発されたことから、共通する効果を持つことが期待される。同時に、表現に用いる素材の違いや、2次元と3次元の違いなど、各技法が持つオリジナリティが存在することもまた事実である。このような構造上の独自性は、それぞれの技法による効果にも影響を与えるものと考えられる。共通した枠組みを有する技法であっても、各技法が有する特徴によって、制作者の体験や治療効果に相違点が生じることが予測される。臨床場面において、芸術療法を導入する際には、セラピストが、これらの共通性や独自性を理解しておくことが重要であると考えられる。

また、ブロック技法における表現は、制作者の内的世界を反映したものであり、臨床心理学的アセスメントとしての活用も可能であると考えられる。ブロック作品を用いたアセスメントに際しては、箱庭療法やコラージュ療法に関するこれまでの知見が大いに参考になるものと考えられる。これらの技法に関しては、パーソナリティや病体水準などの観点から、表現特徴との関連が検討されてきた。ブロック技法においては、「組み立てる」、

「積み上げる」という独自の要素も含まれるため、表現と向き合うにあたり、新たな視点を取り入れることも必要であろう。ブロック技法における表現をアセスメントの一助として用いるためには、パーソナリティや病体水準などをはじめ、様々な観点からの今後の基礎的研究の積み重ねが重要であると考えられる。

### 3. 関連領域における研究の動向

#### ①国内外における研究の蓄積

まず、臨床心理学や芸術療法の領域において、表現技法としてブロックの活用を試みた国内の研究としては、今川・大西ら(1985)、入江・大森(1991)、入江(2004)などがある。海外においては、関連する領域において、いくつかのブロックを用いた研究が実施されている。これらの研究は、これから、臨床心理学の領域においてブロック技法を活用していくために、大いに参考になると考えられる。Brosnan(1998)は、ブロックを用いた幼児の空間認知能力の測定に関する研究を実施している。この研究では、Shepard and Metzler testを用いて、心的回転の能力と、ブロックを用いた構成の完成度の関連を検討している。この結果、幼児の空間認知や構成に関する能力が、ブロックを用いた表現における、構成の正確さなどに影響を与えていることが示された。また、Duenas(1999)は、脳に障害を持つ群と統制群の問題解決能力の差異の検討を、ブロックを用いて行っている。具体的には、ブロックを用いたモデルの制作課題を実施し、モデルの制作に要する時間や、間違いの数などを群間で比較している。この結果、統制群の方が、短い時間で正確にモデルの制作を行うことが示された。この研究は、認知的機能のアセスメントにおけるブロックの活用の可能性を示すものである。また、

LeGoff(2004)は、自閉症児のグループセラピーにおける、協同ブロック制作の効果を検討している。この研究においては、特に社会的スキルの観点からの検討が行われており、対人スキルの発達を援助する媒体としての活用の可能性が示されている。このように、海外においては、認知的側面のアセスメントや、ソーシャルスキル・トレーニングの文脈の中で、ブロックを活用した研究がいくつか行われている。これらの研究は、治療的効果やアセスメントに関する重要な視点をいくつか含んでいると考えられるため、芸術療法におけるブロックを用いた表現技法を発展させていく上で、大いに参考となるであろう。

#### ②治療の効果・アセスメント・集団場面における応用などに関する研究

ブロック技法における心理的な効果を検討する試みとして、加藤(2006b)がある。ここでは、保証された枠組みとして、基礎板とよばれるプラスチック製の板を台座として用い、被験者はその上でブロックや人形を用いて自由な表現をする。制作の前後でPOMSを用いて気分の変化を測定した結果、緊張や不安などのネガティブな感情が低減される効果が認められた。また、加藤(2007)では、作品の特徴と気分との関連も検討され、臨床心理学的アセスメントの素材の1つとしてブロックを活用できる可能性も示された。さらに、加藤(2007)では、性別や過去にブロックで遊んだ経験の有無などの観点から、制作時の気分変容の差異を検討した。その結果、これらの要因が、活気や緊張などの気分の変化に影響を与えていることが示された。

臨床心理学的アセスメントの観点からの研究としては、Kato & Morita(2010a)、Kato & Morita(2010b)がある。Kato & Morita(2010a)では、日本人の青年期の被験者を対象とし、ブロック作品の形式的特徴

と内容的特徴が検討された。臨床場面において、クライアントの表現に向き合う際に、臨床群のみでなく、一般的な表現の特徴を理解しておくことは重要である。年代や人数などの観点から今後のデータの蓄積が求められるものの、この研究によって示された結果は、作品を見る際の1つの指標として活用できると考えられる。Kato & Morita (2010b) は、TEGを用いて、ブロック作品およびコラージュ作品の特徴とパーソナリティの関連を検討した。その結果、ブロック表現における形式的特徴および内容的特徴とパーソナリティの関連が明らかにされた。同時に、コラージュ表現との共通性や独自性も示されたことから、アセスメントの一助としてブロックを活用できる可能性がより具体的に示された。

LeGoff (2004) がグループに導入しているように、ブロックという素材は、組み合わせ、つなげることによって表現をするという特徴を持っていることから、集団場面においても応用が可能であると考えられる。少人数のグループにおいて、複数の基礎板を繋ぎ合わせた領域の上に、参加者どうしが協力して表現をするという用い方も可能である。加藤・服部ら (2008) は、高校生を対象に協同ブロック制作を実施し、個別描画体験との比較から、その心理的効果を検討した。その結果、他者とともに表現をすることにより、互いの個性への気づきなどの体験が得られることが明らかにされた。また、加藤・小倉ら (2008) は、高機能広汎性発達障害のある中高生を対象としたグループにおいて協同ブロック制作を導入し、相互の信頼感や他者に対する関心などが促進される可能性が示された。その他に、加藤・高木ら (2010) は、多文化間コミュニケーションの分野において協同ブロック制作の導入を試みた。留学生支援の領域においては、言語や文化の背景が異なるメ

ンバーが集まる中で、コミュニケーションを補完する媒体の存在はたいへん重要である。ブロックという素材は、世界中で親しまれていることや、自然に非言語のコミュニケーションを助けることから、留学生支援においては有効なツールの1つであると考えられる。集団場面における活用に関しては、このように発展の可能性が示されているが、グループを見守るファシリテーターの役割なども重要であることから、メリットや留意すべき点など、様々な観点からの検討が必要であると考えられる。

#### IV. 今後の課題

本論文では、コラージュ療法、ブロック技法について、基礎的研究を中心にこれまでの研究の動向をレビューしてきた。

コラージュ療法に関しては、森谷 (1988) 以来、約20年の間に多くの研究が蓄積されてきた。これまでの発展の経緯を十分にふまえた上で、今後の研究の実践が必要であろう。作品と向き合っていく上では、山上 (2010a, 2010b) が示しているように、数量的検討と、実際の事例からの統合的な解釈が重要であると考えられる。事例研究と基礎的研究を両輪とし、それらから得られた知見を総合的に活用する姿勢が大切なのではないか。

ブロック技法に関しては、気分の変化などの観点から、制作時の体験について検討が行われ、臨床場面における活用の可能性が示されてきた。また、性格検査などとの関連から、ブロック表現を、クライアントを理解するためのアセスメントの素材の1つとして活用できる可能性が示されてきた。今後、実践に基づいた検討や、基礎的研究を積み重ねていくことにより、より適切な活用ができるようになると考えられる。また、グループにおける制作など、ブロック技法の活用の可能性は幅



広いものであると考えられる。様々な可能性を視野に入れて、今後も積極的に検討を行ってきたい。

これまで、芸術療法の技法に関する研究は、技法ごとに個別に検討されることが主であった。しかし、複数の技法を包括的に捉え、その効果などを比較検討することは重要であると考えられる。特に、コラージュ療法とブロック技法は、理論的背景や構造に共通する要素も多いことから、これらの技法の共通性や独自性を検討していくことは重要であると考えられる。芸術療法における体験過程に関する汎用性のある尺度の開発などにより、複数の技法を包括的に比較する試みなども今後行っていきたい。

#### 文 献

- Adelstein, L. A. & Nelson, D. L. 1985 Effects of sharing versus non-sharing on affective meaning in collage activities. *Occupational Therapy in Mental Health*, 5(2), 29-45.
- 青木智子 2001 グループにおけるコラージュ技法導入の試み：コラージュエクササイズを用いたグループエンカウンターと気分変容についての検討 *日本芸術療法学会誌*, 32(2), 26-33.
- Brosnan, M. J. 1998 Spatial ability in children's play with Lego blocks. *Perceptual and Motor Skills*. 87(1), 19-28.
- Buck, R. E. & Provancher, M. A. 1972 Magazine picture collage as an evaluative technique. *The American Journal of Occupational Therapy*, 26(1), 36-39.
- Carter, B. A., Nelson, D. L. & Duncombe, L. W. 1983 The effect of psychological type on the mood and meaning of two collage activities. *American Journal of Occupational Therapy*. 37(10), 688-693.
- Duenas, R. A. 1999 Assessment of problem solving skills for traumatically brain injured adults. *Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering*. 60(4-B), 1849.
- 今川正樹・大西道生・山口直彦・中井久夫 1985 面接後ブロック構成について *日本芸術療法学会誌*, 16, 41-46.
- 今村友木子 2006 コラージュ表現 統合失調者の特徴を探る 創元社.
- 今村友木子 2004 印象評定を用いた統合失調症者のコラージュ表現の分析 *心理臨床学研究* 22(3), 217-227.
- 今村友木子 2001a 分裂病者のコラージュ表現—統一材料を用いた量的比較— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 48, 185-195.
- 今村友木子 2001b 分裂病患者のコラージュ表現：枠の効果に関する検討 *日本芸術療法学会誌* 32(2), 14-25.
- 入江茂 2004 ブロック技法を介した場面緘黙児の精神療法過程 高江洲義英, 入江茂 (編), *コラージュ療法・造形療法*, 岩崎学術出版社, 39-58.
- 入江茂・大森健一 1991 相互ブロック作りを介した場面緘黙児の精神療法過程 *日本芸術療法学会誌*, 22(1), 50-60.
- 森谷寛之 1988 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用 *精神神経学雑誌* 90 (5), 450.
- 加藤大樹・高木ひとみ・桂田祐介・濱田祥子・呉宛亭 2010 協同ブロック制作を媒体とした多文化間コミュニケーション活動—気分変化の観点による制作体験の検討— *留学生交流・指導研究*, 12, 157-164.
- Kato, D. & Morita, M. 2010a Form, Content, and Gender Differences in Lego Block Creations by Japanese Adolescents. *Art Therapy* 26(4), 181-186.
- Kato, D. & Morita, M. 2010b Relationships between Features of Collage Works, Block Works, and Personality. *Social Behavior and Personality*, 38(2), 241-248.
- 加藤大樹・服部香子・伊藤里実・森田美弥子 2008 高校生を対象とした協同ブロック制作の試み—個別描画場面との比較を通じた制作体験の検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 54, 111-117.
- 加藤大樹・小倉正義・野田紗也香・笹川祐記・森田美弥子 2008 高機能広汎性発達障害のある

- 中高校生のグループ活動における協同ブロック制作の試み 日本心理臨床学会第27回大会発表論文集, 428.
- 加藤大樹 2007 ブロックを用いた表現技法における気分変容に関する研究—性別と経験の観点からの検討— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (心理発達科学), 53, 141-146.
- 加藤大樹 2006a 高校生の学級における個別コラージュ制作の試み—気分変化と作品特徴からの検討— 学校カウンセリング研究, 8, 17-22.
- 加藤大樹 2006b ブロックを用いた表現技法に関する基礎的研究—POMSによる気分変容の検討および気分と作品特徴の比較— 日本芸術療法学会誌, 35(1,2), 52-62.
- 加藤大樹 2005 高校生のコラージュ作品に関する研究—学級適応・性格の観点からの検討— 日本芸術療法学会誌, 34(2), 23-32.
- 河合隼雄 1969 箱庭療法入門 誠信書房.
- 木村晴子 1985 箱庭療法 基礎的研究と実践 創元社.
- 近喰ふじ子 2000 コラージュ制作が精神・身体に与える影響と効果—日本版POMSとエゴグラムからの検討— 日本芸術療法学会誌, 31(2), 66-75.
- LeGoff, D. B. 2004 Use of LEGOcopyright as a Therapeutic Medium for Improving Social Competence. Journal of Autism and Developmental Disorders. 34(5), 557-571.
- Lerner, C. & Ross, G. 1977 The magazine picture collage: Development of an objective scoring system. The American Journal of Occupational Therapy, 31(3), 156-161.
- 宮澤志保 2004 コラージュ制作における表現特徴および行動特徴と性格特性との関連について 心理学研究 75(4), 365-370.
- 森谷寛之 1993 臨床場面でのコラージュ技法の歴史 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂他 (編), コラージュ療法入門, 創元社, 26-32.
- 森谷寛之 1990 心理療法におけるコラージュ (切り貼り遊び) の利用—砂遊び・箱庭・コラージュ— 日本芸術療法学会誌21(1), 27-37.
- 中井久夫 1993 コラージュ私見 森谷寛之, 杉浦京子, 入江茂他 編, コラージュ療法入門, 創元社, 137-146.
- 中村勝治 1999 コラージュ療法の独自性—コラージュ療法の実践と芸術性— 現代のエスプリ 386, 至文堂, 42-50.
- 中島美穂・岡本祐子 2006 コラージュ継続制作における内的体験過程の検討 心理臨床学研究 24(5), 548-558.
- 佐野友泰 2009a コラージュ療法研究の展望と課題 I—事例研究の動向— 日本芸術療法学会誌, 38(2), 6-16.
- 佐野友泰 2009b コラージュ療法研究の展望と課題 II—基礎研究の動向— 日本芸術療法学会誌, 38(2), 17-29.
- 佐野友泰 2002 コラージュ作品の解釈仮説に関する基礎的研究—コラージュ作品の客観的指標とYG性格検査, MMPIとの関連— 日本芸術療法学会誌, 33(1), 15-21.
- 佐藤静 2002 コラージュ制作者の性格特性と作品特性 心理学研究 73(2), 192-196.
- 鋤柄のぞみ 2005 コラージュ・アクティビティに伴う内的体験の変化—孤独感を制作テーマにして— 心理臨床学研究 23(4), 492-497.
- 滝口正之・山根敏宏・岩岡眞弘 1999 コラージュ作品の発達の研究 (集計調査) 現代のエスプリ 386 至文堂, 175-185.
- 山上榮子 2010a コラージュ解釈仮説の試み (その1) —スコアリング・カテゴリーの提案— コラージュ療法学研究, 1, 3-16.
- 山上榮子 2010b コラージュ解釈仮説の試み (その2) ペルソナ理論を含む質的分析を加えた統合的解釈をめざして